研究主題

やわらかな感性で、しなやかに学び合う子どもの育成

「その子らしい解」を大切にした授業づくり

1　はじめに

本校では、「愛・誠・勇」の校訓のもと、「子どもは、望ましい集団の中で、他者との関わりを通して育っていくものである」という理念を共有し、平成 11 年度から 25 年間、「やわらかな感性で、しなやかに学び合う子どもの育成」の主題を掲げ、研究を進めてきた。子どもたちが出合う「人・もの・こと」に対し、「やわらかな感性」を働かせ、なってみたい自分や解決したい課題を見いだし、友達や教師と共に「しなやかに学び合う」学びを創り上げる子どもの姿を具現してきた。この子どもの姿は、研究主題を継承し、時代や教育環境が変化してもなお、全教職員が求める子どもの姿を共有し続けてきたからこそ具現されたものと考えている。

2　本校で育みたい資質・能力について

本校では、現行学習指導要領実施に伴い、令和２年度の教育課程編成時に本校の子どもの実態、これから社会に出て必要な力、学習指導要領で求められている力の三つの視点で「本校で育みたい資質・能力」について検討した。そして整理されたのが「９つの力」である。

＜本校で育成をめざす「９つの力」＞

	<確かな学力の向上（知）> 共に学ぶよさを味わいながら、主体的に追究し続ける子ども	<豊かな人間性、社会性の育成（徳）> 自他のよさを認め、よりよい人間関係をつくることのできる子ども	<体力の向上と健康・安全（体）> 自他の健康や安全に関心をもち、進んで運動・行動する子ども
生きて働く「知識及び技能」の習得	・既得の知識及び技能と関連付けながら獲得した、様々な場面で活用できる知識及び技能	・様々な実践を通して獲得した、互いのよさを生かして協働するための知識及び技能	・危険から自他の身を守り、健康を保つとともに、自分の体力を高めるための知識及び技能
未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」の育成	・自ら問いを見いだし、多面的・多角的に考えながら、友達と共に最適解を創り上げ、表現する力	・相手の考えに共感したり自己を表出したりしながら、自己理解や他者理解を深め、よりよい人間関係を築く力	・自分の課題を設定し、その場の状況や自分を取り巻く環境や心身の状態に応じて判断し、行動する力

学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性等」の涵養	・「人・もの・こと」に主体的にかかわり、多様性を認めながら、共に学ぼうとする態度 ・自らの学びを振り返り、粘り強く学び続けようとする態度	・自己への気付きを深め、あこがれに向かって、自己の感情や行動を統制しながら成長しようとする態度 ・寛容な心で他者のよさに目を向け、多様性を尊重しようとする態度	・体力向上や健康保持に、主体的かつ協働的に粘り強く取り組もうとする態度 ・基本的生活習慣や望ましい食習慣及び安全などについて、正しい判断に基づき、自己を統制しようとする態度

３　ひとみ輝く子どもの学びについて

本校の研究では、授業において「９つの力」を発揮する子どもの学びの姿を「ひとみ輝く子どもの学び」とし、実践を重ねてきた。研究の成果を分析する手立ての一つとして、子どもへのアンケートを実施してきたが、「９つの力」の中で、３年間課題として挙げられた力があった。それは、「自ら問いを見いだし、多面的・多角的に考えながら、友達と共に最適解を創り上げ、表現する力」である。（前ページ□囲み部分）

今年度は、上記の重点化して育てたい資質・能力と目の前の子どもの姿、教師の授業実践上の課題を基に、「ひとみ輝く子どもの学び」を以下のように設定した。

令和６年度　ひとみ輝く子どもの学び

友達と関わりながら、一人一人がその子らしい解をもち、表現しようとする子どもの学び

「友達と関わる」ことについて

「９つの力」を育成する研究をはじめて以来、「相手の考えに共感したり自己を表出したりしながら、自己理解や他者理解を深め、よりよい人間関係を築く力」については、よく身に付いていることが明らかになっている。共感性が高く、友達と関わりながら学習することについては本校の強みであると言える。しかし、共感するだけではなく、時には批判的に考えたり、今までになかった考えを生み出したりしながら友達と関わることで、思考力・判断力・表現力が育成されるのではないかと考える。

「その子らしい解をもつ」ことについて

私たちはめまぐるしく変化し続ける社会の中で生きている。科学技術は日々進歩し、高度に発達したAIは私たちの生活を大きく変化させるとまで言われている。また、福島県は原発問題を抱え、廃炉まで課題は山積している。絶対的な正解もなく、一人一人の幸せや価値観も異なるこれからの時代では、物事を様々な側面から、また異なった立場から見ることで、悩みながらも考えを深め、自分らしい解を生み出していく必要があると考える。教師が子供一人一人に応じた働きかけを工夫し、友達との関わりを通して、「できた」「わかった」「納得」「〇〇すればよい」「△△と考えたら解決することができる」「満足」「好き」「大切にしたい」「続けたい」と感じるような、その子らしい解をもつにはどうしたらよいのか、検証していきたい。

「表現しようとする」ことについて

昨年度は「相手意識をもった人との関わり」をひとつの柱に設定し、研究をしてきた。関わる相手のことを考えながら学習を進めることで、表現の仕方を工夫する児童の姿が見られた。相手意識や目的意識をもって表現する力は高まってきていると考える。しかし、情報を再構成して表現したり、目的に応じて表現方法を選択して使ったりする力は十分身に付いていない。表現する力を育成することで、それぞれの子どもの既存の経験や知識と、学習活動により整理・分析された情報とをつなげ、一人一人の子どもの考えが高まっていくようにしていきたい。

4　研究仮説

研究仮説

教師の見取りをもとに、子ども同士の関わりを支える働きかけを工夫すれば、一人一人がその子らしい解をもち、表現することができるであろう。

5　研究内容

①　教師の見取り

前研究において、「高鳴る学び」「高め合う学び」「つなげる学び」のひとみ輝く子どもの学びの視点を共有し、子どもの学びを見取る眼を鍛えながら研究を深めてきた。教師の見取りから授業改善をしてきたことについては、これからも大切にしたい視点であると考える。今年度は、教師の見取りから、子ども同士の関わりの質を高める働きかけを工夫すること、に重きをおいて研究を進めていきたい。

②　子ども同士の関わりを支える働きかけ

前年度の研究では、９つの力を高める教師の構えとは何かを研究してきた。単元展開を見据えながら子どもたちに寄り添ったり見守ったりすることで、子どもたち同士の自然な関わりを生んだり、次の活動へつなげたりすることができた。しかし、思考力・判断力・表現力を育成する関わりに十分なっていたかには疑問が残る。子ども同士の関わりの質を高めるための教師の働きかけとは何か、その働きかけによりその子らしい解をもつことができたのかを検証していきたい。